



悠木の里づくりがスタート!

「スギトピア・おぐにまつり」に参加して

今年の秋は天候不順で農家の仕事も遅れ気味でした。文化の日は前日までの荒模様が一転して好天気となり、小国町の林間広場では、お祭り気分が盛り上がりつつありました。町制五十周年を記念して開催された「スギトピア・おぐにまつり」のオープニングです。

小国は総面積の約八割が森林。その豊かな資源を上手に生かすのが「悠木の里づくり」です。

会場入口には大きな大根の造り物連続々としてくる貸切バスや自動車の列。会場に近づくにつれ、私も子供のようにワクワクする思いに駆られました。

林間広場は高い杉林を切り開いて造成されたもので、日頃はスポーツ大会などに開放されています。その広場がこの日はすっかり様変わり。スギトピアA館・B館を中央に、催し物ステージ、展示コーナー、バザーコーナーといったいくつものテントが設けられていました。

場内は、ブルーに統一したジャンパーやハッピー姿の主催者の人々が忙



見つめよう、確かな小国の今とみらい
小国観光・産業みらい21

約八割を森林が占めているそうですが、ここに育つ小国杉を大いに利用した町づくりをしよう、というのが「悠木の里づくり構想」です。葉祥栄氏にデザインをお願いしたスギトピア館やステージは、小国杉の角材をボールジョイントで組み合わせ、見事な立体を作りあげていました。

来春には、葉祥栄氏デザインの小国杉を使った建物の第一号が国鉄宮原線小国駅跡地にお目見えするということになります。



試作施設が開設され、特産品づくりの手助けの場として利用されています。将来は、ジャージー牛乳の乳製品なども手掛けたいとの事ですが、この日はリンゴとブルーベリーのジャムが出展されていました。係の方が、「これはとりあえず五百本づつ作ったのですが、五年先を目標に無添加無着色の手づくりの良さを賞味していただけるものを作ります。」と力説されていました。

昼過ぎ、日頃鍛えた太い腕で満席の中に割り込んで食べた肥後ビーフのパーベキューも忘れられない味となりました。この「スギトピア・お



ぐにまつり」は、熊本、福岡、北九州市の各地でチラシを配ったり、小国出身者を通じて口コミで宣伝するなどPR活動が行き届いたからでしょうか、他市町村の方がたくさん詰めかけていました。その辺を意識してか、パーベキューのコーナーでも大変好意的な接客態度が目立ちました。こうした点にも収穫を祝うだけの産業祭に終わらないで、「反響の場」、「PRの場」としている姿勢がうかがえます。他にもユニークなものに大根引きなどがありました。この日から逆算して播種するという計画性には、お客様を楽しませてくれる心使いが見受けられ、一味違うんだなあと感心させられました。

将来を考えた先人達の植林に支えられ、小国はいま、新しい時代へ。

小国杉は、明治時代に北里栄喜、大塚栄磨、橋本武次郎の三氏が吉野地方に向かい、とり入れたということです。三氏は、杉の植林が進ん

計画的な商品開発。効果的なPR。一、五次産品づくりも盛んです。

加工品展示コーナーでは、柴三郎漬けと名付けられた漬け物が目に入りました。世界的な細菌学者北里柴三郎は小国郷出身で、町の誇りとする人です。その意図を感じながら、「商品化する計画はありますか」とお尋ねしますと、「もちろんです」という答えが返ってきました。なかなかすごい商魂です。一・五次産業という言葉が各地で聞かれるようになりましたが、小国町では九月に加工



小国町役場
森枝敏郎さん

ママさん特派員
平野たか子さん

だから、杉山ばかりの小国郷になってしまおうので、各所に桜の木を植えたそうです。それから百年。桜は現在も町の公園に大木として残り、春を賑わせてくれます。そして、小国郷は杉の美林に囲まれ、林業で経済的にも恵みを受けてきました。

最近、間伐材の問題が、林業に不安を投げかけていますが、そんな中で、悠木の里づくりが動き始めたのも時代の移り変わりでしょうか。

小国杉に支えられながら生きてきた町の人々が、小国杉の新しい時代を創り出そうとする。そんな意気込みを感じる秋晴れの一日でした。

